

## 障がいのある子ども達の音楽あそびの実践-地域における課外活動支援の取り組み-

著者	伏見 千悦子, 澤田 悦子
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	6
ページ	137-143
発行年	2014
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00001366/">http://id.nii.ac.jp/1136/00001366/</a>

## 研究報告

## 障がいのある子ども達の音楽あそびの実践

## —地域における課外活動支援の取り組み—

伏見千悦子<sup>1</sup> 澤田 悦子<sup>2</sup>

1. 北翔大学生涯学習システム学部学習コーチング学科 2. 北翔大学短期大学部こども学科

## 抄 録

本稿は、生涯学習に位置づけられる子どもの放課後支援として、平成25（2013）年度に本学内で実施した「障がいのある子ども達の音楽あそび」の活動内容を報告するとともに、参加者のアンケートから、その意義と可能性を探るものである。

文部科学省生涯学習政策局は、放課後や週末等に、子どもたちに学習や様々な体験・交流活動の機会を提供する「放課後子供教室」などの教育支援活動を促進し社会全体で子どもを支える方針を打ち出している。しかし、障がいのある子ども達が安心して放課後を過ごせる居場所が十分に確保されているとは言えない。そこで、生理的、心理的、社会的働きにより、心身の癒しや治療、療育にも用いられてきた音楽の特性を有効的に活用し、聴く、歌う、動く、奏する、創るなどの多様な遊びを通して、障がいのある子ども達と参加者が交流を深める機会を提供したいと考えた。

毎回の活動は、音楽遊びを中心としたプログラムであるが、造形活動や運動遊び、伝承遊びなどを組み合わせることによって、個性豊かな子ども達のニーズを反映することができたのではないだろうか。また、学生スタッフと活動終了後に反省会を持ち、感想や疑問について話し合うことで情報共有と次回への課題意識を高めることができたと考ええる。

キーワード：障がいのある子ども、音楽遊び、生涯学習、放課後支援、交流

## I. はじめに

厚生労働省では、障がい児施設での支援として事業の一元化に取り組み、身近な地域で支援が受けられるよう、どの障がいにも対応できるようにするとともに、引き続き、障がい特性に応じた専門的な支援が提供されるよう質の確保を図るなど、障がい児への支援が充実しつつある<sup>i</sup>。

また文部科学省による生涯学習推進のさまざまな取組の中で、教育振興計画部会は自立、協働、創造を可能とする「生涯学習社会の構築」を目指すことが示された<sup>ii</sup>。それは、一人一人が、多様な個性・能力を伸ばすことや、個人や社会の多様性を尊重し、共に支え合うことであり、その実現のために次のような活動事例が挙げられている<sup>iii</sup>。学習活動では読み聞かせ、体験活動では工作・実験教室やスポーツ・文化活動、交流活動では自由遊びや昔遊び、地域の行事への参加などである。しかし、

障がいのある子ども達への放課後支援は十分とは言えない。「(略)娘が自閉症と診断を受けた頃、(略)色々なことに関心を持ち始め、リズムに合わせて踊るようになったり、音楽に興味を示してきたので、何かないか？色々探していましたが、なかなか受け入れてもらえる場所がありませんでした」<sup>iv</sup>と保護者が障がいのある子どもの遊びの場を求めており、その要望を受けて筆者らは音楽療育ワークショップを実践してきた経緯がある。

特別支援学校教諭を養成する本学においても障がいのある子どもへの様々な支援に取り組んでいるが、その子ども達と家族を含む小集団での音楽活動の場が少ない現状を踏まえ、北翔大学音楽療育の会を立ち上げることにした。

## Ⅱ．音楽あそびの実際

### 1. 活動の目的

- ① 障がいのある子どもとその家族の課外活動として、余暇の充実を図る。
- ② 音楽表現遊びを中心とした多様な遊びを通して子ども達の心身機能の向上を支援する。
- ③ 子ども同士、子どもと学生スタッフとの交流を深め、社会性を養う。
- ④ 保護者同士の交流・情報交換の場とする。
- ⑤ 保育者を目指す学生の実践的学びの場とする。
- ⑥ 教員の研究活動と学生の指導を行う。
- ⑦ 大学の施設を活用した地域貢献活動とする。

### 2. 活動の概要

教員とスタッフは9時に集合し、打ち合わせと楽器・教材等の運搬、会場設営などの準備を開始する。大学玄関から会場までの廊下に案内表示を貼り、学生が大学玄



写真1 受付の様子



写真2 開始前の自由遊び

関から参加者を誘導する。9時30分頃から会場に着いた参加者に受付の手続きを行う（写真1）。教員が名簿による出席確認、個人情報の取り扱い説明、プログラム配布、保護者からの相談などに対応する。学生スタッフは子ども達に声をかけて、名札をつけ出席カードにシールを貼った後はピアノに触れたり、ボールや風船、フープなどを用いて遊んだり、歌遊びや鬼ごっこなどを子どもの状況に合わせて適宜行っている（写真2）。

10時からの活動では、始まりと終わりの意識付けと身体表現「あたま、かた、ひざ、あし」を毎回行い、中間の約45分間で季節や行事をテーマに、歌唱、身体表現



写真3 大型絵本の読み聞かせ



写真4 パネルシアター発表

表1 活動の進行と内容

時 間	内 容
9:00～10:00	打ち合わせ・会場設営等の準備・受付・自由遊び
10:00～10:05	始まりの意識付け「みんなで遊びましょう」
10:05～10:10	身体表現「あたま、かた、ひざ、あし」
10:10～10:55	「季節のテーマによる遊び」
10:55～10:58	終わりの意識付け「あしたもげんきで」
10:58～11:00	挨拶（今日の振り返りと次回の連絡）

(手遊びや体操), 楽器演奏 (タンブリン・鈴・カスタネット・ミュージックベル・トーンチャイムなど), 造形活動, 運動遊び, 学生による絵本の読み聞かせ (写真3) や紙芝居, パネルシアター発表 (写真4) などを行った (表1)。

なお, 参加者への配布資料より抜粋した各回の「季節のテーマによる遊び」の内容を図1～5に, また活動の様子を写真5～12に示す。



写真7 ③制作「魚をマーブルの海に泳がせよう」  
折り紙の後に魚釣りを楽しむ

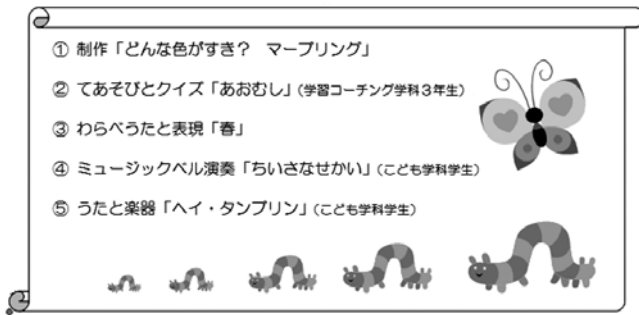


図1 第1回目6/8の季節のテーマ「はる」

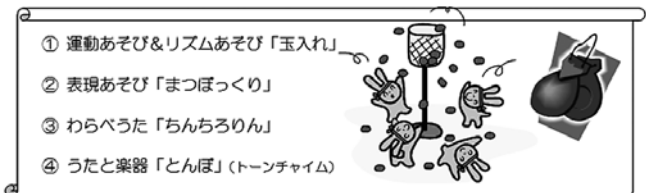


図3 第3回目10/5の季節のテーマ「あき」



写真5 ④ミュージックベル演奏「ちいさなせかい」学生の演奏を聴く



写真8 ①運動あそび&リズムあそび「玉入れ」新聞紙を破ったり丸めたりして遊びに活用する

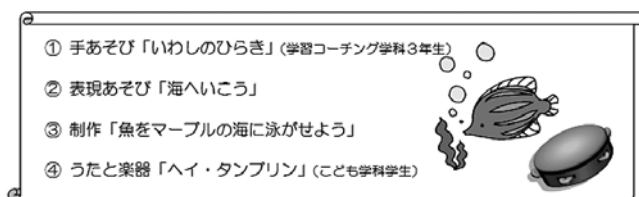


図2 第2回目7/13の季節のテーマ「なつ」



写真9 ④うたと楽器「とんぼ」歌いながらトーンチャイムを演奏し、重なる音の美しさを感じ取る



写真6 ①手遊び「いわしのひらき」

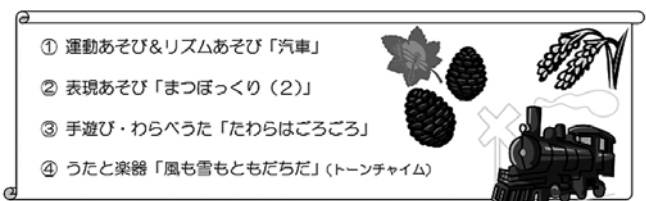


図4 第4回目11/9の季節のテーマ「あき」



図5 第5回目12 / 7の季節のテーマ「ふゆ」



写真10 ②表現・運動あそび「汽車ごっこ(2)」バルーンを用いた粗大運動



写真11 ④造形あそび「まつぼっくりのツリー」小さなツリーが完成したところ



写真12 ⑤うたと楽器「風も雪もともだちだ」「きよしこのよる」指揮者を見ながらトーンチャイムを演奏する

平成24(2012)年度は試行期間として7月、10月、12月の3回実施し、平成25(2013)年は6月、7月、10月、11月、12月に1回ずつ合計5回の活動を行った。広報は、江別市内と札幌市厚別区、白石区、豊平区など本学近隣の幼稚園・保育園・保育所・認定こども園などの35ヶ所および前年度の参加保護者へ案内を送付し、さらにまんなか新聞への掲載も依頼し、参加を呼びかけた。対象は障がいのある子どもとその家族(父親、母親、兄弟など)である。

活動内容の計画と進行は、リトミックと音楽療法を専門とする本学教員2名が担当し、音楽を中心とした表現活動や造形活動、運動遊びなどを実施した。活動を支援するスタッフとして本学短期大学部こども学科の音楽療法研究会心音(ここね)に所属する1年生と2年生、長期履修3年生および生涯学習システム学部学習コーチング学科伏見ゼミ生や幼稚園コースの学生が参加した。

大学の施設は844教室と619教室を使用した。実際の活動を行う844教室は、グランドピアノが配置され可動式机と椅子が常設されており、参加人数や活動内容に合わせて椅子や使用教材が配置できる。子ども用の椅子とカラーマットは、小学校や幼稚園での模擬授業演習室として使用できる619教室から運び、活動内容に応じて姿勢を保持しやすいよう考慮した。619教室は、場合によっては活動に参加できない子どものクールダウンの為に使用することも考え、安全で安心できる環境の構築に配慮した。活動終了後は、619教室で学生スタッフと約1時間アンケート用紙に記述しながら振り返りや質疑応答を行った。

### 3. 参加実態

#### ① 子どもと保護者

対象者は1歳から9歳までの子どもとその家族(父親、母親、兄弟)であった。6月:10家族27名、7月:8家族17名、10月:7家族17名、11月:5家族14名、12月:4家族11名が参加した。

表2 平成25(2013)年度の実施日と参加人数

回	月	日	子ども	保護者	兄弟	教員	学生	合計
1	6	8	12名	父 2名 母 10名	4名	2名	13名	39名
2	7	13	9名	父 2名 母 7名	0名	2名	14名	34名
3	10	5	8名	父 1名 母 7名	3名	2名	10名	31名
4	11	9	7名	父 0名 母 6名	2名	2名	12名	29名
5	12	7	4名	父 1名 母 5名	2名	2名	13名	28名

## ② 教員と学生スタッフ

教員2名に加え、学生スタッフの参加人数は、6月：13名、7月：14名、10月：10名、11月：12名、12月：14名が参加した（表2）。

## Ⅲ. 保護者の要望や意見

活動内容の改善のため、毎回参加した保護者へアンケート用紙を配付した。のべ23家族から回収し、Q1から3までの結果を図6から8に示した。また、Q4は、この活動への要望、感想などが記述されているため、原文を表3にまとめた。

新しい環境や見通しの持てない活動は不安が大きいいため、始まりと終わりには毎回同じ曲を使用し、季節のテーマでは前回の活動を振り返ったり、同じ曲を別の活動に展開するなどの配慮をしている。活動内容は概ね楽しかったとの評価を得られ、中でも歌あそびと表現あそび、楽器あそびが好まれたことが分かる。また、音楽の活動を楽しんで欲しい、多彩な経験をさせたいという願いが参加の理由に挙げられた。

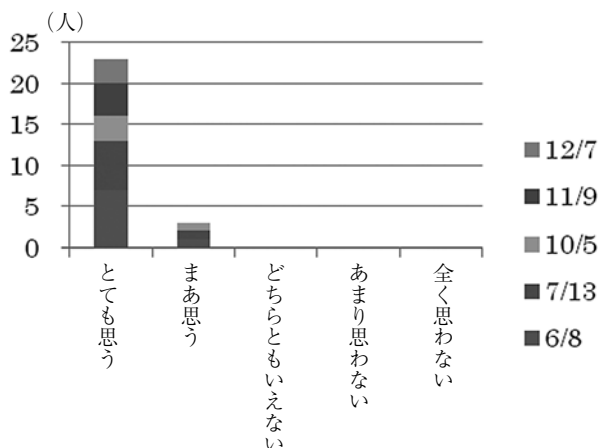


図6 Q1「本日の活動を楽しいと感じましたか」

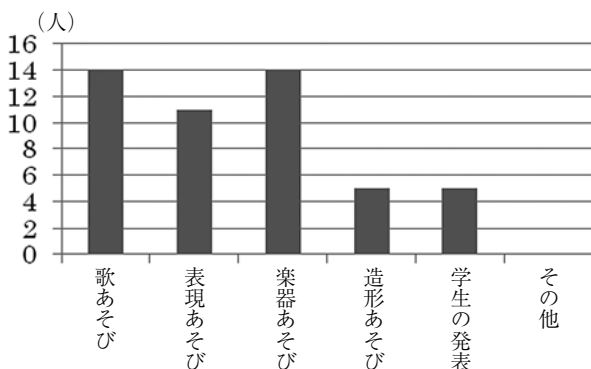


図7 Q2「お子さんの好きな活動は何でしたか。(複数可)」

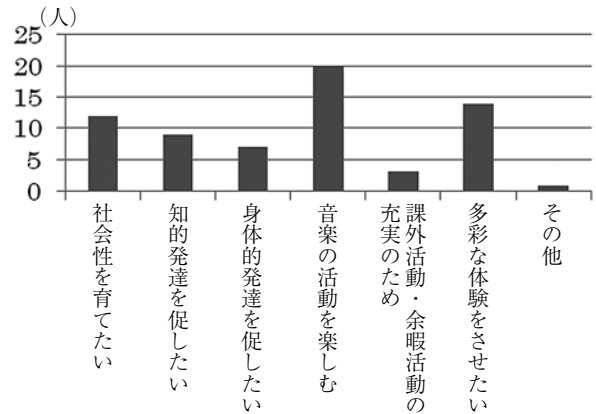


図8 Q3「この会に参加するお子さんに期待することは何ですか。(複数可)」

表3 Q4「この会に対して、ご要望がありましたらお書きください」

- 6/8 ・お姉さんたちの対応がよかったです。笑顔がかわいらしかったです。初等科に通っていた頃のことを思い出しました。暑い中、ありがとうございます。次回も楽しみにしています。  
・楽器の体験は喜んでいました。また色々とお願ひします。
- 7/13 ・活動の流れもよくわかってとても楽しく過ごせました。  
・布（パルーン）パタパタ 楽しかったです。  
・さかなつりをとても喜んでました。  
・前回より人数は少なかったけど、内容はまとまっていてより楽しめたように思います。次回もよりしくお願いします。
- 11/5 ・今日もたくさん遊んでいただきありがとうございました。  
・3回目にして子どもが初めていろいろ参加できて、とても楽しかったです。来月もたのしみしています。ありがとうございます。  
・家族で楽しむことができました。ありがとうございました。
- 12/7 ・一年間参加させて頂きありがとうございました。何回か参加させて頂くことで歌も覚えて回を重ねるごとに参加出来るところが増える姿を見られたこと、とても嬉しく思います。来年もよろしくお願い致します。  
・大変お世話になりました。毎回楽しみに来ていました。また来年もよろしくお願い致します。  
・今月も参加できてよかったです。前回くらいから輪に入れるようになり、今日は楽しんでいる様子が見れてほんとに良かったです。来年もよろしくお願い致します。全5回ありがとうございました。

## Ⅳ. 学生アンケート

音楽あそびの終了後、学生はアンケート用紙に記入し、振り返りと質疑応答を行った。本報告では、第1回（6/8）を図9に、そして年度の最終回である第5回（12/7）を図10に示した。

Q1から3において特に変化が見られた。初めは子どもとの関わりに戸惑い、上手く向き合えなかったと感じていたのが、回を重ねるにつれ子ども達を理解しようと

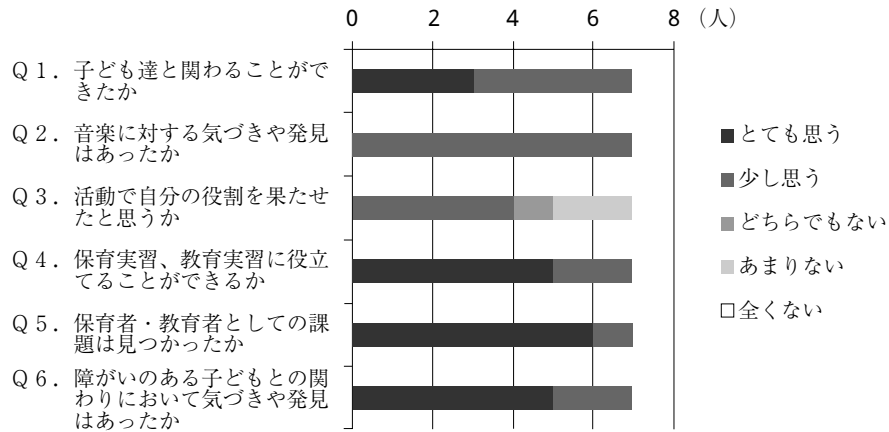


図9 第1回(6/8)の学生アンケート(13名のうち7名が回答)

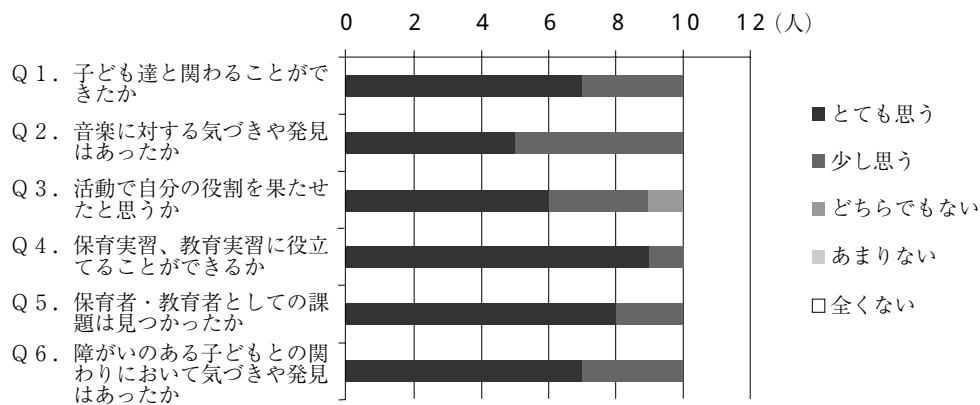


図10 第5回(12/7)の学生アンケート(13名のうち10名が回答)

表4 自由記述 Q7 活動での気づき

Q7 今回(第5回12/7)の活動について気づいたことを考えたことを自由に書いてください。

- ・制作の時、積極的に子どもがどんな形にしたいかイメージしていることがよくわかった。
- ・子どもはやっぱりバルーンが好きだということ。そして好奇心旺盛であり、クリスマスのツリーや音楽でも楽しんで行うことができました。説明を長くするのではなく実践して伝えること、行うことが大事であり、子ども達の自然に行ったことをひろって活動に加えていくことが必要だと思った。
- ・絵本→まっぱっくりツリー→バルーン…などのつなぎの部分をもどのように話すかつなげるかを見ることができた。ピアノの速度を速くしたり遅くしたりすることで動きが変化することを見ることができた。
- ・障がいの度合いが子ども一人一人様々なので、より興味を引き出せるよう、また、自分が作ったツリーに対して愛着が湧くように促していた。子ども達が笑顔で活動に取り組み、次第に溶け込んでくる様子も見られたので良かったと思う。
- ・子どもの言葉の発達やボールを投げる力の育ちなど、一年を通して子どもの発達が見られました。また、子ども自身でも慣れてきたのか、笑顔が増えたり、音楽を覚えたのか足でリズムをとるなど、1回目にはできていなかったことができるようになっており、感動しました。
- ・人数が少なかったので全体の様子を見ることができた。
- ・やりたいことや恥ずかしいなどが言えるようになってきた。

- ・名前のシールを気になる子がいれば背中に貼ると、その子も気にせずスムーズに貼ることができるということを学びました。
- ・教室の中に入ろうと興味を持っていたけれど、大きい音にやはりびくつきしてしまうのだなと思いました。

表5 自由記述 Q8 次回の課題

Q8 次回の課題をかいいてください。

- ・一人一人の個性をいかした活動。笑顔。大きな声。全員で歌う。
- ・もっと子ども達と関わり、一人一人の個性を引き出し、気持ちを感じ取れるような関わりをもっていきたいです。
- ・積極的に子ども達と会話する。手をつなぐ場面では子どものとなりにいく。動きをオーバーにする。自分ができることは積極的にやりたいと思います。
- ・何回にもわたる活動なので、見通しを持った活動内容。
- ・前回の課題である、もう少し積極的にというのはできたと思います。今回は子どもの名前を覚えて声を掛けるようにできたので、次は短い会話を考えてお話をしたいと思います。
- ・来年、この活動に参加できるかわからないですが、他の活動や実習にこの経験を活かしていきたいです。
- ・来年度も子ども達がたのしめる楽器などを用意して、積極的にふれ合えたらいいなと思います。
- ・この活動は今日で終わりですが、来年もこの活動で学んだことをいかして色々な活動に参加していきたいと

思います。  
・子どもとの距離をしっかりと考えていかないといけない  
と思いました。何に興味を持っているかをよく観察する。

努め、コミュニケーションが取れるようになっていったことが分かる。また、毎回の活動の流れに慣れ、周囲を見る余裕が出てくるとプログラムの中で音・音楽の特性や効果について気づきや発見が増えていったようである。そして何よりも7カ月間で子ども達が成長し、活動を楽しんでいることに感動したり、保育者の視点で進行を観察していたり、自分の課題を明確に持って積極的に行動しようとしている様子が自由記述（表4・表5）からも読み取れる。

## V. ま と め

障がいのある子ども達とその家族を対象とした音楽活動は、本学周辺地域への子育て支援であり、子ども達に学習や体験、交流の機会を提供する生涯学習でもある。文部科学省が推進する放課後子供教室の活動例として挙げられているのが、次の3つである。①学習活動として読み聞かせ、②体験活動としての工作・実験教室や文化活動、③交流活動では、自由遊びや昔遊び、地域の行事への参加などが列記されている。しかし、日本では生涯学習において子どものニーズが反映されていないとの指摘もあり、子どもが主体となれる活動の展開や、持続可能な仕組み作りのために、大学との連携や地域住民の協力が望まれている。本活動は、上記の放課後子供教室の内容を多分に含んでおり、継続的な活動を希望される参加者の期待に応えられるよう、より一層内容の充実を図っていきたい。

本研究は、平成25年度北翔大学北方圏学術情報センター生涯学習研究部研究補助を受けて実施した。

### 参考文献

- <sup>i</sup> 厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課：「児童福祉法の一部改正の概要について」平成24年1月13日
- <sup>ii</sup> 文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会：「第6期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」
- <sup>iii</sup> 文部科学省生涯学習政策局：「今後の放課後等の教育支援の在り方に関するワーキンググループ（第2回）放課後支援の在り方に関する資料」平成25年12月12日
- <sup>iv</sup> 札幌国際大学北海道音楽療育センター：「特別支援教育の心と技を育てる音楽療育活動—音楽療育ワークショップ活動を通して育む学生の実践力と地域ネットワーク—」平成22年3月